

第37回 東京芸術文化評議会 速記録

- 1 日 時 令和6年5月28日（火曜日）10時31分から11時40分まで
- 2 場 所 東京都庁第一本庁舎7階 大会議室
- 3 出席者 青柳評議員、片岡評議員、コシノ評議員、是枝評議員、妹島評議員、
芹澤評議員、日比野評議員、松任谷評議員、宮城評議員、山田評議員、
小池知事
- 4 議 事 東京のアートシーンを世界に発信する政策展開

5 発言内容

○青柳会長 それでは、ただいまより、第37回東京芸術文化評議会を開催させていただきます。

皆様、お忙しい中、御出席いただき大変ありがとうございます。

今日は、初めて出席される方もいらっしゃいますので、座席表に沿って、五十音順で御紹介申し上げます。

まず、片岡真実評議員です。

○片岡評議員 よろしくお願いいいたします。

○青柳会長 コシノヒロコ評議員です。

○コシノ評議員 （一礼）

○青柳会長 是枝裕和評議員です。

○是枝評議員 （一礼）

○青柳会長 それから、妹島和世評議員です。

○妹島評議員 （一礼）

○青柳会長 芹澤ゆう評議員です。

○芹澤評議員 （一礼）

○青柳会長 日比野克彦評議員です。

○日比野評議員 （一礼）

○青柳会長 それから、松任谷正隆評議員です。

○松任谷評議員 （一礼）

○青柳会長 それから、宮城聡評議員です。

○宮城評議員 どうぞよろしくお願いいたします。

○青柳会長 それと、山田和樹評議員です。

○山田評議員 お願いします。

○青柳会長 最後に、本日の司会を務める青柳と申します。よろしくお願いいたします。

早速ですが、ここで小池知事から御挨拶いただきたいと思います。よろしくお願いいたします

す。

○小池知事 皆様、おはようございます。

今日は、この第37回東京芸術文化評議会となりますけれども、これは1年ぶりとなります。本当に皆様方とお会いできて大変うれしく思うとともに、今回、4名の新しい評議員の皆様方にもお加わりいただきました。是枝監督、そして松任谷様、そして宮城様、山田様、どうぞ活発な議論で文化の都市東京、これを盛り上げていただければと存じます。よろしくお願いいたします。

この間、コロナもございましたけれども、大分まちは活気を取り戻しつつあります。数字で申し上げますと、訪日客数、インバウンドでありますけれども、コロナ禍の前の大体8割戻ってきているということ。多分これからまた、円安もありますけれども、さらに伸びていくことが期待されております。お金を落としていく、消費でありますけれども、それは大体5兆円を超えているということで、GDPの中でも一角を占めるようになってると、これは過去最高でございます。多くのまちなぎわいは、皆さんが肌でも感じておられるところだと思います。

やはり、それは安いからというのではなくて、もうそもそもコロナ禍においても、どこに次は行きたいですかという、断然トップが東京だったんですね。それをまさに今、皆さんが喜んで来ておられるということ。その秘密の1つには、やはり新しいものと古いもの、Old meets Newと言っておりますけれども、伝統と文化が混じり合って、東京ならではの多様な文化、芸術があるという、都市の磁力、引きつけるマグネット力ですね、これだというふうに思います。

東京都では、芸術文化を都政の柱の1つに据えております。そして皆様方、これまでもこの芸文評のほうでいただいてまいりました知見も活かしながら、多彩な施策を展開してきたところでございますし、この歩みを止めることはできません。

また、国際的な文化都市としての地位を、さらに今、国際競争も激しいですから、地位を高めていかなければならない、その思いで進めていきたいと存じます。

今日のテーマでございますが、東京のアートシーンを世界に発信する政策の展開と、硬い言葉ばかりになっておりますけれども、どんどん東京をアピールしていきましょと、そして世界へ発信していきましょとということでございまして、皆様方の忌憚のない御意見を頂戴できればと思っております。

また、この芸術文化を軸にしまして、東京の明るい未来を目指していきたいと考えておりますので、どうぞよろしくお願いを申し上げまして、冒頭、御挨拶とさせていただきます。よろしくお願いいたします。

○青柳会長 ありがとうございます。

それでは、次第に従って進めてまいりたいと思います。なお、本日の議事は公開とし、後日、資料や議事録を公開したいと思います。

本日の議事ですけれども、今知事が申されたように、東京のアートシーンを世界に発信する政策展開について、まず、事務局のほうから説明をよろしく願いいたします。

○文化振興部長 承知いたしました。

それでは、皆様、お手元のタブレットを御覧いただきたいと思います。

まず初めに、東京都の文化施策の概要について御説明を申し上げます。

都は、東京2020大会や、コロナ禍での支援事業「アートにエールを！」を経て、ここで得た経験やレガシーを発展させるべく東京文化戦略2030を策定し、取組を加速させております。

ここ10年、国の予算が横ばいである中、都は、若手アーティスト向けのスタートアップ助成を充実させましたほか、アーティストの創作環境の整備、まちなかアートなどにも取り組みまして、文化政策の予算額を10年間で1.5倍以上に伸ばしてまいりました。この歩みを止めることなく、東京の文化をさらに世界へ発信する新たな取組にも着手しております。

本年度から新たに展開する、都の主要文化イベントを御紹介いたします。

まず、ベイエリアでの国際芸術祭でございます。社会に新たな視点をもたらす現代アートは、創造性の源泉ともなり、都市の成長に不可欠なものでございます。いよいよ東京でも「東京お台場トリエンナーレ2025」といたしまして、来年10月に国際芸術祭を開催する運びとなりました。今後、定期開催も視野に、江戸から東京にかけて世界に開かれた玄関口へと変容を遂げたお台場を舞台に、アートを通じて東京の未来の都市像を世界に示してまいります。

続きまして、世界陸上とデフリンピックに向けた文化プログラムでございます。東京藝大を中心に企画される「ろう者にとっての音楽」をテーマとした、ろう者と聴者との協働による舞台や、東京パラリンピック開会式のキャストが再集結した新作公演など、国内外から多様な参加者が集うこの機を捉え、3つのアートプロジェクトを実施いたします。

また、芸術文化へのアクセシビリティ向上にも取り組みまして、都立文化施設の環境整備はもとより、民間団体への鑑賞サポート助成も新設し、共生社会の実現に向けた歩みを進めてまいります。

2025年は、文化イベントのプロモーションにも力を入れてまいります。都が実施する文化イベントをコアイベントといたしまして、同時期に都内で開催される様々なイベントも合わせて、「Art Autumn Tokyo 2025」の冠の下、国内外にプロモーションをしてまいります。チケット販売など様々な情報にワンストップでアクセスできるサイトを実験的に構築することも視野に、グッズや飲食、伝統芸能体験などのアクティビティも企画し、国内外の人々を引きつけてまいります。

続きまして、子供を対象にした新たな文化施策について御説明いたします。

子供たちの柔軟な感性や創造性を育む上で、芸術文化は重要です。都は、新たに「ネク

スト・クリエイション・プログラム」と題しまして、新たな取組を開始いたします。子供の興味や関心に合わせて、一流のプロを指導者に迎え、質の高い体験プログラムにより子供の個性や多様性を引き出してまいります。

今年度は、芸術系大学でのキッズオープンキャンパスや、子供とプロがつくり上げるファッションショーなど4つのプログラムを実施いたします。今後も、様々な領域にプログラムを派生させ、子供たちの未来や生活を豊かなものとすることを目指してまいります。

最後に、都立文化施設の魅力向上に向けた取組を紹介いたします。

まず、江戸東京博物館でございます。現在改修中の江戸東京博物館は、リニューアルを機に、東京を訪れる観光客が必ず訪れたいと思える博物館を目指して、ハードとソフトの両面から取組を進めてまいります。

施設の魅力向上におきましては、世界的な空間デザイナーの重松象平氏監修の下、アプローチや3階広場など入館前から展示への期待感を持てる仕掛けづくりを進めています。また、休館期間を活かしまして、再開に向けた期待感を高めるよう、収蔵品を活用した出張展覧会や海外プロモーションの強化にも取り組み、江戸の歴史と文化を発信してまいります。

次に、庭園美術館のグランドデザインです。

妹島館長を中心に、誰にでも開かれた美術館を目指す姿を掲げたグランドデザインを策定いたしました。旧朝香宮邸という貴重な文化財建築を一層活用するため、ユニークベニューとしてラグジュアリーブランドとコラボをするほか、邸宅と庭園の回遊性を高める東屋や、訪れたいくなるようなエントランスを整備するなど、館のポテンシャルを最大限に向上させるように取り組んでまいります。

以上、駆け足ではございますが、今後、都が力を入れていく取組の一部を御説明申し上げました。これらを踏まえまして、評議員の皆様には、今後なすべき政策展開につきまして意見を頂戴できればと存じますのでよろしくお願い申し上げます。

以上でございます。

○青柳会長 ありがとうございます。

事務局の説明は以上となります。それでは、評議員の皆様から御意見をいただきたいと思いますが、できることなら2回転ぐらいしたいので、最初はお1人3分ぐらいでよろしく願います。

それから、是枝評議員は資料を持ってきてくださっているのですが、ちょっと長めですので、一番最後によろしく願います。

それでは、片岡評議員からよろしく願います。

○片岡評議員 よろしく願います。

東京都の予算について、この10年、文化予算が150%になったということで、国の仕事もさせていただいていますが、1,000億からほとんど変わらない文化庁予算と比

べてすばらしいことだと思いました。

その中で国際芸術祭、トリエンナーレを創設されるということで、これも大変すばらしい施策であると思いますけれども、今やこのトリエンナーレ、ビエンナーレといった国際芸術祭は、世界に300以上あるというふうに言われておまして、やれば人が来るというものではありません。そして、その国際的な発信が必要ということであるときに、海外の専門家に注目されつつ、都民にも幅広く楽しまれるという、この両極のあんばいがなかなか難しく、ここをどうハンドリングしていくのかということが重要かと思えます。

とりわけヴェネチア・ビエンナーレとかドクメンタのような世界の様相を反映したようなトリエンナーレというのはなかなか難しいので、むしろ世界の大都市という一般的な東京のイメージに限定しないで、東京の多様な歴史や伝統や、あるいは自然環境といったような、そうした様々な物語をどう創出していくのかということが重要になるかなと思います。

あと名前も、「東京お台場トリエンナーレ」がもしファイナルな名前だとすると、海外の人になかなか通じにくいかもしれないなと思って、それも少しコメントさせていただきたいと思えます。

それから、このトリエンナーレというモデルは3年に1回の開催なので、組織の維持というのがなかなか難しいんですね。なので、そこに東京都の職員も加わるのかも含め、恒常的な組織をどうつくっていくのかといったことも課題かなというふうに思いました。

それから、都立文化施設の魅力向上の部分につきましては、前回も申し上げたかもしれませんが、収蔵庫の問題がやはり大きな課題になっていまして、東京都も複数の美術館、博物館などをお持ちですから、ちょうど先日も収蔵庫に関するシンポジウムが法政大学で開かれていましたけれども、集合的な収蔵庫にするのか、あるいは見せる収蔵庫にするのか、これは今や国際的にも博物館、美術館が抱える最も大きな課題の1つになっていますので、それも引き続き検討されるとよろしいかと思えます。

取りあえず以上です。

○青柳会長 ありがとうございます。

それでは、次に、コシノ評議員、よろしく願いいたします。

○コシノ評議員 今年度はじまった「ネクスト・クリエイション・プログラム」で、子供向けのファッションプロジェクトの監修をさせていただいています。これまで、子供向けにファッション関連事業はあまり扱っていらっしやらなかったと聞いています。ファッションは、人々の生活に非常に近い、誰でも興味を持てる世界です。

子供たちにファッションショーを体験させる、それと同時に、子供たちがデザインをした服もファッションショーに出てくる。また、自分たちがモデルを担って着る。そしてファッションショーだけではなくて、バックヤードの中ではどのようにこのファッションショーを運営していくかということの具体的な仕事を子供たちに見せます。スタイリストで

あるとか、ヘアメイクアーティスト、それを取材するファッションジャーナリスト、そうしたいろんな分野で、ファッションショーの背景には本当にたくさんの人たちが働いている。子供たちがそういったことを具体的に体験するということは、新たな将来に向けて子供たちにこんな才能があるんだということを、大人が見つけてあげる機会になると思います。

これからのすばらしい人材をつくっていくためには、ファッションという非常に手軽な部分から入って、次への新しい文化に向けて子供たちを教育をしていく方法を我々が考えることも大切です。ちょっとこれから力を入れて、こういった子供たちのファッションショーを作ったり、そういう職業体験をしてもらうことを目指して、今年は少し頑張ってみようと思っております。よろしくお願いいたします。

○青柳会長 ありがとうございます。

以前、19世紀、20世紀のとき、総合芸術というのはオペラが典型だと言われていますが、今の総合芸術の典型というのはファッションショーじゃないかとよく言われますね、音楽や、映像や、全てが混ざっている。たった30分間で、あれだけ高度な文化のプレゼンテーションはないとまで言われていますものね、それを子供というのは面白いですね。

○コシノ評議員 今の一番新しい分野をいろんな形で体験できるのが、ファッションショーだと思うんですね。何が今はやっているかという非常に表面的なものだけではなくて、ファッションショーというのは、その時代時代の全てを表現していくんですけども、それが単なる洋服という見せ方だけではなくて、そこに現代を象徴する何か必ず見つけてもらえるというのがファッションショーの在り方なんです。演出の仕方とか、それからメーカーキャップの在り方とか、洋服は今どういうふう新しいファッションが流れているのかとかということが一挙に見えてくるという、非常に面白いエンターテインメントではないかなと私も思っております。

○青柳会長 ありがとうございます。

それでは、是枝さんは最後をお願いするとして、妹島和世評議員、よろしくお願いいたします。

○妹島評議員 まず、先ほど御説明いただきました、庭園美術館のグランドデザインについてですが、1年前にここで説明させていただきました、おかげさまでこの3月に方向性を策定することができました。

庭園美術館が持つ貴重な文化財を、大切にしながらより積極的に活用していく。本館建物と前面に広がるきれいな庭園、それら全体を回遊できるような動線をつくり、庭園美術館ならではの新しい美術館を生み出し、さらに庭園の利用を活性化する。そして、正面玄関から西洋庭園にかけて、都民の方々が訪れたいくなるような、皆様を迎え入れる空間、庭園美術館としての顔を目黒通りに対して作る。以上策定しました3点について、これからいろんな方の御意見をお聞きしながら、1つずつ丁寧に実現していきたいと思っております。

引き続きどうぞご支援よろしくお願ひいたします。

特に、西洋庭園で何かやろうとする場合、去年の実証実験、それを受けての今年度の第一弾イベントで、雨天でも対応できる東屋の設置の必要性が確認されました。また、正面玄関周りの機能整備が重要であると思ひます。

それから、トリエンナーレはとても面白いと思ひました。片岡委員がおっしゃったように現在トリエンナーレは色々なところで行われていますが、先ほどの知事のお話のように、東京の古いものと新しいもの、それから、いろんな隠れていて見えない文化に触れられる、東京ならではのトリエンナーレが生まれればと思ひます。お台場を中心として、そこから水のネットワークを取り入れて、中心から周辺に移動しながら東京の違った面に触れる。街と重なり合いながら文化に触れ、アートに出会う。何をアートと呼ぶのか、新しい体験、トリエンナーレに育っていくと素晴らしいと思ひます。。

○青柳会長 あそこは世界を知っていた外交官の吉田茂オフィスに使うんです。それほど素晴らしいところで、しかも様式建築の横にホワイトキューブがあって、だから建築的にすごく面白いですよ。ぜひぜひ。

それでは、次に、芹澤ゆう評議員、よろしくお願ひいたします。

○芹澤評議員 皆さん、おはようございます。

私も、この東京トリエンナーレ、お台場をつけるか・つけないかと、先ほどの片岡評議員の御意見もあって、もう東京だけでもいいのかなと、TTとか思ひますけれども。

あと妹島評議員がおっしゃった、水でつなげるという、何か例えばその期間中はウォータータクシーとかをばんばん出して、何かバスでどんどん行けたりとかしたら面白いかなと思ひますし。

ベニスも芸術と裏番組ですか、建築のほうもあつたりするんですけども、だから東京はもう建築も含めたトリエンナーレだと、もっとダイナミックになるのかなと思ひますし。そういうのをちゃんと、もう来年ですから早々と、皆さんやはり旅行のプランニングをするには、早々と発表して、いろいろな、アート界にはインフルエンサーがいっぱいいますので、世界的に。もちろん東京は、もう既にかなり注目は浴びているんですけども、これのためにつて、またさらに来る方々が多いと思ひますし。その際に、先ほどもいろいろな六本木アートナイトとか、いろんなものと組み合わせるといふお話はありましたが、ほかの東京中のいろんな美術館とか、いろんなところもそれに合わせて、何か例えばどこかの国の館になるのか、あるいはアーティストを特にフィーチャーするのかとか。あと、やはり手っ取り早い形では、この東京トリエンナーレの賞とか、やっぱり金賞とか、何か出すとか、そうすると新しいアーティストに注目を浴びさせることができるかなと思ひました。どうもありがとうございました。

○青柳会長 ありがとうございます。

それでは、日比野評議員、よろしくお願ひいたします。

○日比野評議員 よろしくお願ひします。先ほど紹介の中で、来年、東京都で行われるデフリンピックに伴う文化プログラムで、東京藝大と、今、東京都のほうと一緒に、ろう者における音楽ということテーマとしたプログラムを始めております。

きっかけは、東京都とちょっと前にTURNプロジェクトというのをやっていた、福祉と芸術の交流ということで。その中で、ろう者の中における、ろう文化というものの存在というものを知るきっかけになり、決して障害ではなくて、ろう者ならではの文化を持っている。我々は、今、音声で話しているのは、これは聴文化。いわゆる言語も日本語、外国語があるように、ろう者のコミュニケーション文化があるんだということを、まずはそれを一番基盤にしてということで、ろう者と聴者とのコラボレーションの表現、舞台表現をしていこうということで、今始めております。1年ほど前から始まって、まずは互いに知ること、これ結構互いに思い込んでいることが大変多くて、じゃあ稽古を始めるときに、じゃあ台本を作ろうかという、その台本というものが、ろう者にとっては意味がなさないう、それを読んだところで発声できないので、せりふがあるわけじゃない、ト書きがあるわけじゃない、そのプロットの状況を共有して表現する、というような気づきが本当にたくさんありました。

その中で、来年の11月に、上野の東京文化会館で公演があるんですけども、それは1回切りの公演になりますが、一番大事なのは、そのプロセスの中で互いに気づき合う、発見が大変多くありますので、公演の後も引き続き、研究していく母体として東京藝大のほうでは展開していく予定です。

あと、今日のテーマの東京のアートシーンを世界に発信するというで言うと、言語、ろう者と聴者という共通言語というものが日本語じゃないので。必ず、今度パリのオリンピックの後にパリでデフリンピックがあるかと思っておりますので、ここで開発した、ろう者における音楽というものを東京発として、次のパリのデフリンピックにも文化プログラムとしてというようなことを視野に置きながら、今ちょうど稽古が始まっておりますし、これはパリに限らず、言語を超えた異文化交流という、これまでになかったろう者と聴者の文化を考えることによって、人間の根本的なところの表現とは何ぞやとかということとか、プラス、今度は最先端の情報保障的なものも加えながら発信していければなと思っておりますし。

そういうときに、今日、是枝監督が見えていますけども、やっぱり映像というのは大変重要になってきます。映像というものと最先端の技術と、あとは本当、人間の根本的な、ろう者にとっての音楽とは何ぞやというようなところのちょっと哲学的な話にもなるんですけども、総合的なものを開発していきたいと思っておりますし、同時に、今、それをどう評価していくのかということところがとても重要で、このろう者における音楽とは何ぞやということを開発しながら、その評価をするということも始めました。

この文化の社会的インパクトをちゃんと同時に発信していく、プログラムをつくると同

時に、社会的インパクトというもの、この評価をこれは今までの数値化できるものじゃないので、これも開発していかなくちゃいけないんですけども、それも同時に今やっておりますので、そういうものを含めて、東京のアートシーンとして発信していければなと思っております。

○青柳会長 ありがとうございます。

デフリンピックでぜひ。恐らく現代都市や近未来都市で一番のあれは、シームレスな社会をつくる。そういう意味で、聴者とうろう者をシームレスにつなぐ必要がある。そのためにも、こういうことは非常に重要ですよね。ありがとうございます。

それでは、次に、松任谷評議員、よろしくお願ひいたします。

○松任谷評議員 とっても困っているんですけど。初めてで右も左も分からず、そして僕はこれといった取組をしておらず。なので、ここで僕が何をできるのかを、まずはちょっと手探りで探らせていただこうかなと思ひ、一回パスしようかなと思ひます。

○青柳会長 じゃあ、一回、回ってから、またいろいろ御意見をいただきたいと思ひます。

それでは、次に、宮城評議員、よろしくお願ひいたします。

○宮城評議員 よろしくお願ひします。

先ほどコシノ評議員がおっしゃっていた、子供が最先端のファッションショーに取り組み、これはとっても面白いなと思ひて、今の子供たち、1人でできることのスキルはどんどん高まるわけ。しかし、人と一緒に何かをしなくちゃいけない、あるいは、人と向き合ひて、ある意味ではぶつからなくちゃいけないというようなシチュエーション、これはなかなか経験できないですよね。ですからファッションは、まさに人と向き合う土俵なので、演劇もそうですので、ぜひ赤の他人と肉体ごと向き合うという経験を小っちゃいうちに、子供のうちにしてもらいたいな。ですから、「ネクスト・クリエイション・プログラム」では、子供たちに演劇のトップのものに触れるという機会もつくられればいいなと思ひました。

もう一つは、さっき知事がおっしゃった、今、世界の都市間競争が激しいわけですけど、その中で意外に耕されていない畑として演劇があるんです。つまり、今、世界の若いアーティストの中で演劇で身を立てていこうと思ひた人が、どこにまず行こうというところが案外思ひつかない。いわゆる、メッカと言われるところが。アジアの人にとって、世界で活躍したいな、演劇でやっていきたいなと思ひたとき、じゃあ、まず東京に行ってみようと思ひような、そういう仕掛けが東京でできないかなと思ひて。若い二十歳そこそこの演劇人たちが東京に集まひてきて、切磋琢磨すると。

しかも、ここで僕が重要だと思ひるのは、日本語が少数言語だということが結構ポイントだと思ひていて、アジアのアーティストの多くは、母国語が少数言語なわけ。これは英語とか、フランス語とか、中国語とかが母国語の人とは全く違ひわけなんです、

演劇をやるうえで背負っている条件が、何しろ言葉の壁があるジャンルなので。だけど逆に言えば、少数言語を使って、これが世界の人に通じたときには、この相手は物すごく深いファンになってもらえるわけです。言語のファンというのは、一過性のものじゃなくて、ずっと応援してくれるので。日本語のファンになってくれたら、かなり長いこと日本文化を応援してくれますよね。演劇の若いアーティストたち、みんな自分の母国語をどうやって世界に受け入れてもらおうかというのを必死に考えているので、そういうテーマについては、東京はとて素晴らしい土俵になると思うんです。ですから、ぜひアジアの若いアーティストたちが東京に集まってくるような、そういうプラットフォームをつくってほしいなと思いました。

以上です。

○青柳会長 ありがとうございます。

今、イギリスなんかでも演劇に字幕が出るようになりましたね、あれは日本の影響ですよ。そういう影響がだんだん広まっていると思います。ありがとうございます。

それでは、山田評議員、よろしく願いいたします。

○山田評議員 今、宮城さんから、国際総合芸術がオペラからファッションに移っているとおっしゃって、そのとおりかなと思ったのですが、少し個人的には、ちょっと悔しい思いをしております。ここで音楽とか、オペラとか、宮城さんさすがポジティブにおっしゃるなど拝見しておりましたが、コシノさんがおっしゃったように、時代の表現であるとか、現代の象徴だと。まさにそうで、我々音楽の世界とかオペラの分野も頑張らなきゃいけないと思うのですけれども。

今後、東京が海外に何かを発信していくということに当たって、国際的な芸術祭をやっていくと、これはとても素晴らしいことだと思うんです。ただ、僕の感覚で言うと、トリエンナーレって一体何だと言って、ぱっと分かる人が、恐らくほぼほぼいないのではないかという根本的なあれなんですけれど。外国語を片仮名にしたときに、ぱっとそれでイメージできる人がどれぐらいいるのだろうかという、根本的なネーミングなこともそうなんですけれど、そのことが知られていなきゃいけないということと、あとその中身のことがあって。

とかく国際芸術祭とか、国際という名前がつくと、やっぱり海外からのタレントを呼び込む割合がそれなりに出てきて、それで国際性を出すということが一般的なんですけれど。例えば音楽シーンに至っては、東京なんていうのは、もう世界で一番世界のオーケストラが聞ける都市なんですよ。芸術祭がなくても。だから既に東京という都市は、国際芸術祭というのをやらなくても、オーケストラ文化とかでは常に年がら年中もう芸術祭が行われているような状態だと思うんです。

それで、新しくこのトリエンナーレというものを開催するに当たって、それでもなおかつスペシャルな企画として海外のオーケストラを呼ぶとか、オペラを呼ぶとか、とてもそ

れもすばらしいことだと思うんですけども、どちらかというと、そこにせつかくのお金を投じるよりかは、今後の海外発信を考えるのであれば、日本人にしかできない、日本製作の日本独自のものをちゃんと作って、それを輸入から輸出に切り替えていく。やっぱり20世紀は、どうしても追いつけ追い越せの文化で輸入に頼るしかなかった時代が多かったと思うのですが、これからはどんどん日本独自のものを輸出していくというふうに切り替えていかなければいけないんじゃないかなというようなことを思った次第であります。

○青柳会長 ありがとうございます。

それでは、ここでは是枝評議員によりしくお願いいたします。

○是枝評議員 よろしく申し上げます。

今回からの参加なんですけれども、2年ほど前から映画監督を中心に有志で集まって、映画、日本映画界の業界の改革の提言をするような、そういう活動をしていたところなんです。なかなかその映画業界が1枚岩になれずに、ちょっと苦しんでいた状況で今回のこの評議員のお話をいただいたもんですから、そこで自分たちが提言をしていったことを、頂いた資料の「東京文化戦略2030」と、その中にある東京アートハブ構想に沿った形で提案を、ちょっとリライトしてまとめたものを皆さんにお配りさせていただきました。それに基づいて簡単にちょっとだけ説明させていただきます。

提言5つにまとめました。2ページ目に項目が書いてあります。

1つ目の多様な文化に触れる。これ東京は世界的にもすごくまれに見る、ミニシアターの文化というのがまだ残っている、パリと多分東京だけだと思いますけれども、とても珍しい都市です。名画座はさすがに配信がこれだけ隆盛したのでほぼ消えてしまいました。昨年、岩波ホールもなくなりました。ただ、まだミニシアターは随分頑張っていますので、それをどういうふうに残し活用していくかということが、その多様な映画に劇場で触れるということに関していうと、とても大事になってくると思っております。

2番目、子供が映画に触れる機会をどうやって増やすかということがとても大事になると思います。先ほどコシノさんがファッションショーを体験するというお話をされましたけれども、なるべくその子供たちに映画づくりを経験してもらおうというのが重要になるなと思っております。

昨年公開した僕の制作ですが、「怪物」という映画が長野県で撮影していたんですけども、エキストラで参加してくれた小学生たちが総合学習で映画をつくりたいというふうに言い出しまして、6年生、1年間かけて1クラスで3本の映画をつくるという取組を、映画制作の現場見学から生まれたんですね。なので、僕も何度か授業に行って、カメラはこういうふうにかかすんだよというような、こういうふうになると面白いよってアドバイスをして上映まで立ち会っていきました。そういう取組がもっとこれが学校教育の中でできるものだけではないと思うんですけども、もっと盛んに行われるといいなというふう

に思っております。

3番目、次世代クリエイターを育てる。これとても大事なんですけれども、東京都の取組としてはタレント・トーキョーというのが、今、東京フィルムメックスの期間中に行われていると思います。これがいけない、あれがよくないという批判ばかりしていると、すごくネガティブになりますけれども、なので、うまくいっているものを褒めてくれというふうに言われたんですが、タレント・トーキョーはとてもうまくいっていると思います。とても結果を出しています。ここをきっかけにして国際的に活躍する監督たちが生まれてきているので、ぜひこれはもちろん継続していただきたいですし、拡充していただけると、ここを目指してアジア中からこれから活躍するであろう監督の卵が東京に集まるということが実現できていくと思いますのでぜひよろしくお願いします。

4番目、褒めた後に多少批判しますけれども、東京の魅力を世界に発信する、先ほど都知事も映画の魅力にしたいと思っておりますと言っていたんですけどとても心強いんですけれども、東京都は日本で恐らく一番撮影が難しい都市です。許可が下りません。撮影許可が本当に厳しくて、実は今触れた「怪物」という映画は脚本上は東京が撮影でした。ただ、学校と消防車が走るという、ト書きがあったことでもう制作部が「これ東京では無理なのでほかでもいいですか」という、ほぼもう許可が出ないんですね。これを何とかしないと、東京で撮りたいという方たちは海外にとにかく多いです。

ただ、結果的に撮れずに今だと名古屋に行くか、福岡へ行ったり、地方都市へ行くんですね。本当にもったいないので、ぜひここはフィルムコミッション中心にしてきちんと撮影、どこでも自由には言いませんけれども、ここならこういうことが可能だという情報をコミッションに集めていただいて、条件を1つにさせていただきたい。ぜひよろしく申し上げます。

5番目、もう5分経ちましたので終わりますけど、5番目は夢のような話なので、構想というところにまだ至っていませんけれども、今、東京国際映画祭も非常に頑張っていますが苦しんでいるのは中心になる場所がない、拠点がありません。いろんな劇場をもちろん借りながらやっていくんですけども、メインになる施設がなかなか定着できずにあります。これもお隣の韓国だと釜山という映画祭がすごく活況を呈してきまして、大きな映画の殿堂というのができております。それをつくるのは大変お金もかかりますし、時間もかかると思うんですけれども、例えばですが、表参道にあるこどもの城がどういうふうな、今、状況にあるのか分かりませんが、こどもの城をうまく活用してあそこに行けば子供たちが、もちろん映画だけではなくて、音楽や演劇や絵画やダンスやいろんなものに触れられる、そういう場所として再生していただくととても有効的なのではないかなど。そこにできれば、東京国際映画祭の事務局も入れていただきたいというそんな思いであります。

駆け足になりましたけれども、この5つを、初回なんでちょっと軽めにしましたけれども

提言させていただきます。よろしく申し上げます。

○青柳会長 ありがとうございます。

それでは松任谷評議員、この辺でよろしいですか。

○松任谷評議員 質問なんですけれど、この会って何回ぐらいあるんですか。

○青柳会長 年に1回ぐらいですね。

○松任谷評議員 年に1回って少なくないですか。

何かもし本当にディスカッションをするのであれば、何かもうちょっと継続的に、例えば、分かんないですけど、LINEグループなり何なりが存在していて、そこに発言がいつでもできるようにというのってどうなんでしょう。

全然とんちんかんですか。

○青柳会長 その件、事務局とも相談していろいろ考えたいと思います。

○松任谷評議員 そうですよ。

あと、自分的にはもちろん子供のこともかもいつも考えているんですけど、例えば何か新たなアイデアがある場合ってどういうふうにはここでは提出していったらいいんですか。やっぱり書類を作って提出するという形なんですか。

○青柳会長 1年に1回なんですけど、例えば前回のときは、今、お辞めになった野田秀樹さんが、やはりインターナショナル芸術祭の大きいの開きたいということで、今、是枝監督のような形で発表していただきました。

○松任谷評議員 ああ、なるほど。

伺っていると幾つかはアイデアはあるんですが、どうやって提出したらいいのか、これが1年先だとちょっとまずいなと思いながら、今、伺っていました。

○青柳会長 ありがとうございます。

その辺少し御意見がたくさん知事に聞こえるようにしたいと思いますので、事務局とよく相談しておきます。

それでは一巡しましたので、ここでもう一回皆さんの御意見を聞いていろいろお考えあるでしょうか、また片岡さんからいいですか。

○片岡評議員 はい。

皆さんの御発言を伺っていて、新しい芸術祭とそれからもう一つ「Art Autumn Tokyo 2025」という秋に全てをまとめていくという案がありましたが、これ実は既に「アートウィーク東京」という事業で既存の美術館やギャラリーをバスで回れるようにするイベントが数年前に始まっています。どなたかおっしゃっていましたが、東京もそれからロンドンやパリやニューヨークのような大都市にはやっぱりトリエンナーレとか、ビエンナーレとか、そういう芸術祭がないというのが通例です。というのは、既に山のように美術館や芸術活動が行われているからです。やはり新たにつくるとなると、既にあるものをうまく取り込んでいく必要があって、単に芸術祭をやるというよりは、今、「アートウィーク東

京」をやり始めているように、既存のアート施設とどう一緒に、全体を大きく見せていくのかが問われると思います。さらに都市間競争についていえば、今、1月に大体みんなシンガポールに行く、9月にフリーズ・アートフェアというアートフェアがソウルにできたので、9月にみんなでソウルに行く、そういう渡り鳥のようにアート関係者はカレンダーをつくっているの、秋を東京とするのであればそこに発信力を持って10月は東京に来てくださいというような、そのポイントをつくっていく必要があるかなと思います。もしかしたら芸術祭1つのことだけではなくて、どうやって戦略的にインバウンドを視野に入れて大きく膨らませていくのかというその辺りの俯瞰的な視点が必要かなと改めて思いました。

○青柳会長 ありがとうございます。

それでは。

○コシノ評議員 芸術祭の話なんですけども、アートの世界では、ファッションとアートというのは全然別物だという感覚が過去からずっとありました。けれども、私は今の時代はアートとファッションというのは一体だと思うんですね。実はファッションというのが、生活文化の中ではアートだと思っているんです。アートシーンの中にファッションという、いわゆる立体というのかしら、ファッションとして何か参入できないのかなというつも考えてまして。アートという観念の中でファッションというものが一体になれるような、何かそういった催しがあれば、もっと多くの人たちがアートに対して興味を持って参加し、またそれを自分たちの生活の中に取り込むという姿勢が非常に高まってくるんじゃないかなということを常に考えております。

○青柳会長 ありがとうございます。

先ほどおっしゃったように以前は美術、ファッション、それから工芸、デザインというふうに分けていましたが、これも全部シームレスになりつつあって、区別がつかなくなっていますよね。建築も恐らくそれにつながるといいますんで、ぜひそういう考えで何かやりたいと思います。

是枝評議員。

○是枝評議員 さっき大体しゃべっちゃったんですけど。

昨日まで実はカンヌの映画祭に行っておりました。審査員をやっていました。今年はどうも、今年に限らないですがここ数年日本映画、日本の監督たちに対する注目度というのがすごく上がっています。新しい才能がたくさん日本から出てきているというのが共通認識としてあります。ただ、なかなかその才能をサポートしていく体制というのが、とても少ない、ほかの国に比べると。それがとてももったいないなと思っています。今年は何れでもVIPOが中心になって、新人のプロデューサーを3名派遣して向こうでシンポジウムをやったり、パネルディスカッションに参加したりという取組も行いました。ユニジャパンが中心になって、ジャパンパビリオンというところでパネルディスカッションも盛んに

行っていました。少しずつ意識は変わってきているような気がします。

監督週間という部門で日本のアニメーションが上映されたんですけども、そこにカンヌの地元の小学生たちが担任の先生に引率されて180人映画祭にわいわいと参加をして、賑やかに映画を鑑賞していました。そういう意味でもまちに開かれた、子供たちに開かれた映画のイベントというのが、本当は僕はこの芸術祭にも含んでいただいても全然構わないと思っているんですけども、今まであまり映画に対しては、そういう形の取組というのがややほかのアートに比べると遅れていたのかなというふうに思いますので、ぜひこれからは構想の中に映画を含んでいただければなと思っています。

以上です。

○青柳会長 ありがとうございます。

それでは、妹島評議員。

○妹島評議員 シームレスというお話がありましたが、いろんなことが東京で起こっているわけですが、トリエンナーレが今までバラバラに起こっていたことをつないでいったら、新しい全体が出来上がるような気がします。町と重なりあっている部分が巨大化したり、あるいは全体が大きく膨らんで現れたり、今までにない東京に出会えるのではないかと思います。

それから先ほどの撮影許可がでないということですが、とてももったいないと思いました。子供たちの参加の話が出ましたが、町の中でそういうことが行われていると、見るだけでなく、もしかしたらちょっと参加できたり、ある意味で教育の場にもなる。現実の東京を外国の人がドンドン使って、未来の違う東京の空間が見えるのではないのでしょうか。最後ですが、松任谷さんがおっしゃったように、私もはじめ1年に1度しゃべってどうなのかなという思いを持ちました。今は美術館の館長をやらせていただいているので、事務局の方とお話する機会も増えましたが、確かに全員でもう少し何らかの方法で意見の交換ができればいいのではないかと思います。

○青柳会長 ありがとうございます。後ほど知事からコメントいただきましょう。

それでは芹澤評議員、よろしくお願いします。

○芹澤評議員 はい。

1つはやはり外国の方により何かワンストップショッピングじゃないですけども、東京でアートシーンとか言うと、いつ何が起きているかとか、どこなのかとか、もう少し何か共通のプラットフォームみたいなインターネットの情報があるといいかなとは思っています。それともう一つは、先ほどからいろいろな芸術の形のクロスオーバーとか、まちとの融合というのがありましたけれども、パリでは毎年、でもパリだけじゃないと思います、フランス全土からFête de la Musiqueって音楽の日というのが、多分御存じかとは思いますがけれども、そうするともう夜中の1時だったかな、真夜中までもう大道芸人じゃないですけど、もうどこでもみんなクラシックやら、ポップスやら、もうあっちこっちで音を鳴らし

ていいという日があつて、やはりすごい人気のところはもうすごく人が集まったり、あんまり人気のないところとかもどんどん繰り広げられているんですが、そういうのもこのビジュアルのトリエンナーレと重ねてそういうものも行われるとより人の動きというのが活発になるのかなとか、騒音の問題とか、いろいろ都市ですからあるとは思いますが、何かそういうことも考えられないかなと思いました。

○青柳会長 ありがとうございます。

じゃあ、日比野評議員。

○日比野評議員 はい。

例えば、東京藝大に外国の大学とか、様々な人たちが来たときに、どこが一番人気あるかということと工芸なんですね。工芸の部屋を見たい。上野のど真ん中に東京藝大、ろくろがあつたりとか、本当に鑄金・彫金の熱した、何百度と熱した、鉄を溶かすようなところがあつたりとか、染色の部屋があつたりとか、本当物を作る職人たちの様子のような空間が藝大の中にはあつて、そこが一番人気があるんですね、海外から来られた方々。

そして日本も、江戸もそうですけども伝統的な工芸というものがたくさんたくさん江戸にはあつて、そのただ単なる昔のものだねじゃなくって、それをどう今に活かしていくかということ、本当工芸とか、建築とかという領域があるんですけども、例えば工芸科の子が最先端のデジタルを使って、現代陶芸的なものを作って現代美術のような世界観に入っていくとか、もう本当に領域がどんどんどんどん滲んでいく。でも一番共通なのは、物を作る人がそこにいるという、そこがとてもなんですかね、発信する魅力の部分だと思います。東京上野の中には青柳先生もおられた文化施設はたくさんあつて、美術館・博物館があるんですけども、唯一東京藝大が教育機関としてあつて、そこには毎年毎年18歳・19歳・20代の子たちがアートを目指しながら、音楽を目指しながらそこにいるという、その人がいるというところの魅力、アーティストがいるところがやっぱり東京の魅力なのかなと。そういう人たちと出会えるような本当に江戸でも職人さんたちが作っている姿を見せるというシーンもたくさんありますし、何か物だけを見せるんじゃないでそのプロセスとか、作っている姿とか、その人たちと語り合える場があるとかというものがやはりとてもアートの結果だけじゃなくってこういうふうにならされているんだという、何か出会える場というのがとてもとても重要なかなとは思っています。

○青柳会長 ありがとうございます。

それでは松任谷さん。

○松任谷評議員 また回ってきましたか。

東京オリンピックのときに応援村という組織に参加したことがあつたんです。最初はその応援村は東京オリンピックを応援するという意図で始まったらしいんですけど、コロナになってしまって、コロナで苦しんでいる人を応援するというプロジェクトに変わったんですね。そのときにそれでもオリンピックがあることになって、どういうことができるだ

ろうという話になったときに子供たちにとにかく選手村にいっぱいいろんな絵を飾って、それでみんなをウェルカムしようという、そういうアイデアを出したことがありました。

完全にはできなかつたけれど、少しは選手村に飾っていただくことができた。何か子供たちにできることってすごく説得力があって、何かいろんなことができるのではないのかなというのが1つあります。

そしてもう一つあるとすると、僕は、今、本当に子供の教育に物すごく興味があって、一度やりたいのは僕は動物学ということをお子に教たい。それはどうということかという、戦うとか、奪うとか、そういうことを頭から否定するのではなく動物から学ぶ。そういう何ですかね、本能というか、頭から人間として教えてしまうのではなく、何かそういうものをみんな持っているんだけど、それをうまく社会生活に共存させるようなという、僕はアートといったときに、押さえつけられることによる抑圧の発散場所かなとちょっと思っているところがあって、何かそこら辺のところはいつも研究したいなというテーマなんです。だから抑えられるからどっか発散したい、それで何か表現が出てくる、何かストーリーが出てくるという、なんか、今、全然もうこの場ではとんちんかんかもしれませんが、僕が研究したいテーマはそんなところなんです。

○青柳会長 ありがとうございます。

それでは、宮城評議員。

○宮城評議員 はい。

これだけボーダーレスになってきている状況なのに実は日本にいる若い人たち、意外に海外の文化に触れる機会というのが増えていない、むしろ減っている。例えば外国文学の翻訳なんかもどんどん減っていますね。外国の音楽を聴く人も減っている、演劇についても、僕の若い頃よりも海外の演劇を見る機会がむしろ減ってしまいました。

ですから、日本のアーティストにとっても、アジアの若いアーティストがすぐそばにいるような場所というのをつくることによって日本のアーティストも刺激されるんじゃないかなと思っています。

さっきは枝評議員が、例えば、こどもの城のようなところをリニューアルしてとおっしゃっていました。新しく造るんじゃなくてももう既にある場所に、例えば、アジアの演劇や身体表現のアーティストが20人、30人いるみたいな、常時そこにいるみたいなところを作れば、そこに日本の若いアーティストも絡んでいってお互いに刺激ができるんじゃないかなと思いました。

もう一点だけ、伝統的な身体表現、いわゆる伝統芸能、これはこれで大事だということは最近よく言われますけれども、案外伝統は伝統として1つの閉じたジャンルとしてくくられてしまうんですね。これは本当にごく最近のことであって身体表現の歴史を見ると日本の場合はずっと過去と新しいもの、過去にあったものと新しいものが出会いながら、身体表現が発達してきたわけですから、今日の表現者も伝統的な表現者ともっとこう出会

っていかになくちゃいけない、それについても何かそういう場所のようなものをですね、特に若い人たちが同時に並列に学べるような場所があったりすると面白いと思います。

以上です。

○青柳会長 ありがとうございます。

では、山田評議員、よろしく願いいたします。

○山田評議員 是枝さんのこの資料を拝見して、そうか、こういう手があったのかということを知りませんでして、私も「クラシック音楽都市東京構想」とか書いてくればよかったかなとか思ったんですけど、つまり、どの分野でも何かこういうことができたらいいなというのが多分あると思うんですね。それを音楽都市とか、映画都市とってしまった瞬間に1つになってしまうから、そうではなくて例えばそれを空欄にしておいて、「〇〇都市東京」みたいな形でそこにどれでも当てはめて、どの分野でも何か活性化できるようなシステムがあったらいいのかなと思ったのと、この会議が年に1回では少ないというのは本当にそうだと思ったことなんですけども。是枝さんがお作りになったこういったものが評議員からだけではなくて、一般の方々からもこういうものが提出できるような目安箱的なものがあつたらもっと広がりを持つのかなと思ひまして。

あと先ほど日比野さんが、人がいる魅力こそが東京の力、魅力ということをおっしゃったんですけど、人そのもの自体が、全員がアーティストたり得るという考えもあるのかなと思ひまして。人がそこにおいて、どうしてもこちらがやるパフォーマンスをする側とそれを見る側って分けがちなんですけど、そうではなくてもう全員が、見る側も含めて全員がアーティストであつて表現者であるという、そのようなアプローチから何か新しいものがつくれないかなと、ちょっと漠然としたことなんですけども思ったりいたしました。

○青柳会長 ありがとうございます。皆さんいろいろお話になったのでちょこっとだけ私も。

いつも思っているんですけどね、ウォーターフロントって近現代都市の特徴があるんですけども、よく言われるのがウォーターフロントというのは、19世紀の末にシカゴで大火があつて、それで全部五大湖のほうにまちの公園なんかが出て行つた、それが開始だつて言われるんですけど、実はそれよりももっと早く日本は浜離宮とかね、何とかウォーターフロントをもう既に17世紀の頃からあるんですね。ですから世界が参考にしなくちゃいけない。

それから、例えば、四ツ谷から御茶ノ水の辺りのあの景観、中央線のすばらしい都市景観だと思うんだけど、あれも江戸時代に形成されているんですね。それから隅田川とか、中川とか、ああいう大きな川の付け替えなんかも江戸時代に行われているって、とんでもない世界的に見ると大規模土木工事を江戸時代にやつてそれが残っているんですね。だから東京には文化財が残っていないって言うけども、そういう土木的な文化財は本当によく残っている。

それをもって、さっき知事はマグネットっておっしゃったけども新しいものと古いものをくっつけて、それでこの東京を売り出すということが非常に重要じゃないか。しかも日比野さんがさっきおっしゃっていたように、いろんな出会いというのがあるんで、だから西と東、それから子供と老人、いろんな出会い、だからエンカウンターシティみたいな言葉で東京を世界のエンカウンターシティにできるんじゃないかなという気がして、それでいろいろまた皆さんの御意見をこれから聞いていきたいと思います。

それでは最後にちょっと時間が押していますが、知事からコメントをいただきたいと思っています。よろしく願いいたします。

○小池知事 それぞれの分野から、またオーバーオールで東京、芸術、アートをどうすべきか、もう本当に貴重な御意見賜りました。

松任谷さん、いろいろ日々連絡できるような体制を整えて、皆さんから、ああ、こんなことあるじゃないかという思いつきでも、それこそ発想なので、それが受け止められるようにちょっと事務局のほうと工夫をしていきたいと思っています。

最近海外の都市、姉妹都市、友好都市など訪れる機会がございます。新しいそのいわゆる新興都市もビルがニョキニョキ建っちゃって、一体どこにいるのかよく分からないようなそんな気さえます。建築家にとってみたらこんな面白い東京は、自分の作品がぼんぼんできるわけですからね。でもやっぱりそこにアートがあるのか、歴史があるのかというこの違いは大きいと思うんですね。私たちが見逃してしまうようなそういう伝統や歴史これを逆に今のインバウンドの人たちはむしろそこをあぶり出してくれているような、そんな気がします。

私はいつもこのブルーのバッジをつけていますけれども、Tokyo Tokyoということで観光の関係ですけれども、ここにちびつと赤い印刷ミスみたいなのがありますが、これ実はスクランブル交差点をモディファイしたもので、彼らはあそこ大好きでしょうね、何も無いのに何かこう、タイムズスクエアも何があるってわけでもないけれども、一応行くというそんな感じで。

ですから我々気づかないところで先ほどの水を活用したインフラのアピールなどは、これは洪水対策とか、SDGsをですね、そんな舌をかみそうなこと言わなくても、昔はやっていたわけで、そういったところをいかにアピールしていくのかということも問われているんだろうと思います。

子供たち、次の世代をどうやってアートにもっと目覚めさせていくのか、そしてまた学ぶところをどう確保していくのか、発表する場をどう確保していくのか、そういったことを総合的により強めていきたいと思っています。

都市間競争って結構激しくて、例えばスタートアップなどもシンガポールあり、今、この間パリでViva Tech、スタートアップですねあり、バルセロナあり、ロンドン、ベルリン、ボストン、もうそれぞれでビエンナーレ、トリエンナーレと同じように競い合っ

っている中で、どう訴求力を高めるかということで、東京はサステナビリティとそれからハイテク、これを組み合わせたコンセプトで頭文字を取ったら、SUS・サスティナブルとHIを重ねたらちょうどお寿司になるんですね、ということで、SusHi Tech Tokyoということで申し上げたらもうここで一気に訴求力が高まって、まだ2年目なんですけども、アジアでもシンガポールと競い合うようなにぎわいになっています。ちょっとした工夫を重ねることによって、多くの世界を引きつけ、世界のワンオブ都市ではいけないと思うんですよね、東京は。そういう意味でこれから今日お話しいただきましたような提案を十分参考にさせていただきたいと思っております。

それから、私が結構好きなのが越中おわらの風の盆が好きでね。あれって町中もう日にちが決まっていて、もう3年先ぐらいまで旅館を予約したり、踊り手さんも奏でる人たち、奏者も子供たちからずっとやっているのね。しっとりとして、私は大好きなんですけれども、なんかこうやはり町中が一体感があって町中でそのアピールをし、ああ、これぞ伝統、歴史という、何か精神的なものも含めて、私はあれはとてもすばらしいとかねがね思っております。

東京にもいっぱい宝物があります。それを発掘して磨いて伝えて、そしてそれをさらに広げていくことによって、さらにまた文化芸術が東京ならではの味わいを見せていくということになると固く信じておりますので、どうぞよろしくお願いを申し上げます。

今日本当にいろんな御意見をお伺いできてうれしく思っています。東京もこれからも勝負でございますので、どうぞよろしくお願ひ申し上げます。ありがとうございます。

○青柳会長 ありがとうございます。

それでは事務局のほうにお返しします。

○文化振興部長

ではこれにて第37回東京芸術文化評議会のほう終了いたしたいと思ひます。

皆様、本日はどうもありがとうございました。

以上